

日本語学の研究を 英語論文の参考文献欄に書く場合その 4

— 著者名と発行年の示し方 —

北見友香・竹原英里・小野真依子・漆田彩・福嶋健伸^{*1}

1. 「Fukushima, Takenobu (1997)」か「Fukushima, Takenobu.1997.」か

今仮に、英語で論文を書いており、以下の文献を引用したいとする（便宜上、福嶋に関係する研究を示すことにする）。

- (01) 福嶋健伸 1997 「いわゆる質形容詞の非過去形と過去形について」（筑波大学 文芸・言語研究科 日本語学研究室『筑波日本語研究』2、pp.117-132.）
- (02) 橋本修・安部朋世・福嶋健伸 2008 『大学生のための日本語表現トレーニング スキルアップ編』（東京：三省堂）

文献をどのように参考文献欄に書けばよいかは、通常、各雑誌の投稿規定を見れば分かる。例えば、Journal of East Asian Linguistics に投稿を考えている場合、当該雑誌の “Instructions for Authors” 等を見ることになるだろう。

しかし、実際に論文を執筆する際に、「どの程度まで、バリエーションが許容されているのか」ということは気になることである。例えば、先ほどの(01)の文献でいうと、「Fukushima, Takenobu」という表記が標準的であるとしても（MLA 方式等参照のこと）、「FUKUSHIMA Takenobu」のような表記は、どの程度、使用されているのだろうか。また、業績の発行年（以下、単に発行年とする）を組み合わせた場合、「Fukushima, Takenobu (1997)」のように、（ ）を用いてよいのだろうか。それとも、（ ）を用いない「Fukushima, Takenobu. 1997.」のようなパターンにするべきなのだろうか（Journal of East

Asian Linguistics の Instructions for Authors では、後者のパターンのみが示されている)。

本文中では、「Fukushima (1997) argues that……」のように、() 内に年号を入れる場合が多いので、できれば、参考文献欄でも () を用いたいようにも思う。ただ、もし、() の使用に問題が無いとしても、「Fukushima, Takenobu. (1997).」のように、ピリオドを入れるべきなのかも、迷うところである (この点、APA 方式等参照のこと)。

結局、このようなことは、「投稿規定を見る」ということと、「各論文の中で、統一が取れていればよい」ということの狭間で、執筆者の責任で各自が決定していることだとは思ふ。しかし、一方で、「一般的に許容されている書き方なら使用したいが、あまり許容されていない書き方ならば避けたい」という気持ちもある。端的に言えば、「実際には、どうなのか」を知りたいわけである。

そこで、本稿では、Journal of East Asian Linguistics の参考文献欄を資料として、著者名と発行年の表記の仕方を調査した。

2. 調査の概要

調査対象とした資料の詳細は、漆田他 2012 の第 2 節で述べた通りなので、ここでは省略する。また、本研究は、小野他 2013 と同様、実践女子大学大学院文学研究科国文学専攻博士前期課程の授業である日本語学演習 B の一環として行ったものである。

本来であれば、雑誌論文も含めて全てのデータを示すべきであるが、時間の都合上、漆田他 2012 で挙げた、(日本語で書かれた) 単行本における著者名 (第一著者のみ、259 名分) と、著者名 (単著、共著含む)・発行年の組み合わせ (230 例) の表記の仕方を示すにとどまっている。なお、著者名・発行年の組み合わせを調査する際には、「et al」や「ed」等の表記があるものは調査対象から外している。

3. 調査の結果

まず、著者名に関して述べたい。結論を述べると、「Fukushima (姓), Takenobu (名)」というパターンがほとんどであり、全体の約 88% (259 例中の 227 例) を占める。なお、「FUKUSHIMA Takenobu」のような表記は、今回の調査では一例も無かった。以下に、調査結果の表を示す (便宜上、「Fukushima (姓)」と「Takenobu (名)」を用いて、パターンの具体例を示す)。

(03) 表 1 Journal of East Asian Linguistics の参考文献欄における、First Author の名前の示し方

パターン	延べ数
Fukushima (姓) , Takenobu (名)	227
Fukushima (姓) , T (名のイニシャル)	16
Fukushima (姓) Takenobu (名) ※カンマ無し	7
Takenobu (名) Fukushima (姓)	2
Takenobu (名) , Fukushima (姓)	2
T (名のイニシャル) . Fukushima (姓)	2
その他 / 分類できず	3
合計	259

次に、著者名と発行年の組み合わせであるが、以下のような結果になった。ここでは、上記 (03) で示したパターンの違いは考慮していないので、「Fukushima (姓) , Takenobu (名)」の例で代表させる。また、この調査では、著者名の後の()の有無とピリオドの有無に、調査の焦点を絞っている。(今回は、発行年の後のピリオドの有無には着目していない)。

(04) 表 2 Journal of East Asian Linguistics の参考文献欄における、著者名と発行年の示し方

パターン	延べ数	備考
Fukushima, Takenobu (1997)	145	名前 (西暦) : ピリオド無し
Fukushima, Takenobu. 1997	74	名前 . 西暦 : ピリオド有り
Fukushima, Takenobu 1997	6	名前 西暦 : ピリオド無し
Fukushima, Takenobu. (1997)	5	名前 . (西暦) : ピリオド有り

「Fukushima, Takenobu. 1997」のようなパターンが最も多いと思っていたのだが、実際には、「Fukushima, Takenobu (1997)」というパターンが最も多かった。この結果をどのように解釈するのかは研究者によるだろうが、「Fukushima, Takenobu (1997)」というパターンは、少なくとも今回の調査において、奇異というわけではないようである。

なお、著者が複数の場合の調査結果を簡単に報告すると、予想通り、第一著者のみ「姓, 名」で示し、第二著者以降は、「名 姓」の順で示すパターンが一番多かった。

4. どのように著者名と発行年を示せばよいか

今回の調査からすると、本稿冒頭の(01)(02)の著者名と発行年に関しては、以下のような表記が無難であろうと思われる(発行年以降の表記は、今回は調査対象としていない。よって、発行年以降の情報については、新たに調査が必要である)。

(01) に関する表記:

Fukushima, Takenobu (1997)

あるいは、Fukushima, Takenobu. 1997

(02) に関する表記:

Hashimoto, Osamu, Tomoyo Abe, and Takenobu Fukushima (2008)

あるいは、

Hashimoto, Osamu, Tomoyo Abe, and Takenobu Fukushima. 2008

限定的ではあるが、今回の調査によって、表記のパターンの実態が明らかになったといえる。このような調査を積み重ねていくことによって、英語論文執筆のストレスを、少しでも軽減できる資料を作成できればと思う。当然、著者名と発行年だけの調査では不十分なわけであり、今後も、引き続き、基礎的な作業を進めていきたいと考えている。

注

- *1 本稿の基礎的な調査に関しては、北見友香・竹原英里・小野真依子・漆田彩・福嶋健伸の5名が等量を分担しており、その意味で全員がCo-Firstである。なお、著者名と業績発行年の分析は、北見友香・漆田彩が中心となって進めたものである。本稿の執筆にあたっては、まず、北見友香と漆田彩の両名に簡単な論文構成案を示してもらい、その後、福嶋がそれを大幅に修正した上で実際に執筆する、という手順をとっている。全体のコーディネートは、福嶋が担当している。

《引用文献》

漆田彩・北見友香・竹原英里・小野真依子・福嶋健伸 2012「日本語学の研究を英語論文の参考文献欄に書く場合その1—Journal of East Asian Linguisticsでは、どのように単行本を引用しているか—」(実践女子大学『実践國文學』82、pp. (左) 1-20.)

小野真依子・漆田彩・北見友香・竹原英里・福嶋健伸 2013「日本語学の研究を英語論文の参考文献欄に書く場合その3—Journal of East Asian Linguisticsでは、どのように論文を引用しているか—」(実践女子大学『実践國文學』83、pp. (左) 1-19.)

付記 本稿は、科学研究費(課題番号:24720210、研究課題:近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷に関する言語類型論的研究、研究代表者:福嶋健伸)の助成を受けたものである。

きたみ ゆか・実践女子大学大学院博士前期課程
たけはら えり・実践女子大学大学院博士前期課程
おの まいこ・実践女子大学大学院博士前期課程
うるしだ あや・実践女子大学大学院博士前期課程
ふくしま たけのぶ・実践女子大学文学部准教授